

◆学校教育と生徒への深刻な影響

- ①「学力の質的転換」は時代の趨勢で、大学入試がいつどのように変わるかにかかわらず、二一世紀の社会のために学校も塾・予備校も対応せざるを得ない。しかし、決定的な問題点がある―第一に、基礎基本の徹底的習得なくしては「深い学び」を達成することは出来ないが、当局案にはそのための条件整備が伴っていない。第二は、中々下位層になるにつれ「思考力・表現力・判断力」の教育は重荷になって、いたずらに学力差を拡大してしまうことである。
- ②入試改革は20年の新学習指導要領の実施とその浸透をまって実行すべき施策であるにもかかわらず、はじめにスケジュールありきの強行策なので、実施段階になると次々に欠陥と問題点が露呈するであろう。
- ③英語教育の分野が入試改革で異様に突出している。経済のグローバル化を錦の御旗にした「英語教育の4観点追求」路線である。教育現場は無理難題に苦しむ。
- ④こうした「教育改革十入試改革」を急ぐ理由は、社会の行き詰まり打開に苦慮する政権と財界の危機感の深刻さである。それを承けて文科省や審議会のメンツ、そして少子化に苦しむ教育団体の利権拡充が推進力である。（教育の市場経済化）
- ⑤経済成長のための「人材育成」が目的となり、学校も生徒も「選別と淘汰」の渦中に置かれ、中間層の崩壊と中下位層の切り捨てが進み、その結果、社会の分断と格差の拡大とが促進されるであろう。
- ⑥もう既に多くの学校において、求められる「学力の転換」をこなしきれない状況が拡がり始めた。改革を進めようとしてもできない学校や、行き過ぎ、あるいは見掛け倒しの上滑りな教育が横行すると予想される。その過程を通じて、学校の序列の再編、淘汰・選別がいつきに進むであろう。「悩める学校」「自己変革できずに苦しむ学校」は、教育改革案の修正を求めながら「側面からの支援」を切望している。

◆学校への地域の支援 その中で学習塾はいついずべきか

- ①学校の授業は形骸化したアクティヴ・ラーニングで追われ、教師も生徒も負担過重に苦しむ。学習の未消化「あるいは「脱落」が拡がる。教師はじつくり生徒と向き合う時間的精神的余裕を失い、中下位層の生徒の二極分解が進む。その結果「荒れる学校」や「学びを放棄する生徒」の多発が避けられなくなるであろう。病める学校、病める社会からは、病める青少年がさまざまな形で大量に生み出され、しかも深刻化すると予想される。

- ②この難題をどうすれば解決できるのか―学校と家庭に対する「地域からの支援」が、これからは不可欠になる。それらのサポートがあつてはじめて学校教育の質的転換を促す道が拓かれ、二十一世紀の社会を支える新たな地域共同体を形成する力になる。

ただ、こうした学校の抱える難題にかかわるサポート活動は多様化・高度化を求められている。

文科省のいう「開かれた学校」の理念だが
「学校⇨生徒⇨家庭」の三位一体構造にかかわる専門家や諸活動の自発性に期待して、政治・行政の組織支援施策に委ねるだけでは済まないのではないだろうか。
③私たち「地域に根ざした学習塾」は通塾する生徒を通して家庭にも学校にも、生徒の就職する地域の産業にもかかわっている。地域社会で信頼される存在でもある。社会の危機や教育の大転換に際して家庭や学校と結ぶ活動を展開できる位置にある。

ただし兼ね備えるべき条件と能力を有しているかどうか、自己点検が必要になる。―地域社会の土台とながる積極的な活動体であること、何らかの「得意技」を持っていること、とりわけ時代にマッチした専門性。しかも学校の教師に比べてリーダーもスタッフも能力面でも志の面でも優れていることが望ましい等々―これらの要件である。

④現在の大半の大手塾は市場競争の申し子だから「儲ければよい」企業体であり教育の市場経済化の生む病根に立ち向かうことは本質的に難しい。中小零細の塾にしても近隣の他塾との間で生き残るために日夜必死の闘いを続けており、活動余力は持たない。

だがその中であつて個々の生徒への対応力のある地域密着の小規模な塾や個人塾に注目していただきたい。ひとつひとつは微力な存在であつてもネットワークを組めば、それぞれの得意技を活かした連携プレーが生まれ社会の負託に応え得るであろう。

（塾の会・愛知の設立の理念）

⑤私たちは、できること、しなければならぬことを、各塾が身の丈に応じて誠実に真摯に実践することにしてほしい。学校教育の基軸の変革がうまく進まない状況下では、地域の学習塾が「教育の歪み」を矯正する学習支援活動を担っていくことにする。学校と塾がそれぞれの役割を分担し、対等の関係で連携したい。またゼロサムゲームである生徒獲得・合格実績競争にいたずらに手を染めないことが肝心だと考える。合格は良い教育の結果であつて目標にはならないからである。生徒に接する学習指導の基本は――

- ・ 出来る子には「考える力」をのばす
 - ・ 普通の子には「基礎基本」の習得の徹底
 - ・ できない子には「生きるための基礎づくり」
- ⑥また、学校教育の暗部拡大によって生じる病理に対処できる態勢を持たなければならなくなっている。

- ・ 不登校、ADHD、LDなどの学習支援
- ・ 貧困家庭の子どもの受け入れ
- ・ 合格実績競争のもたらす不合理な進路指導の是正
- ・ 関係諸機関を結びつけるコオーディネイト
- ・ 卒業後も面倒をみる態勢

⑦学校との連携に加えて、教員組織や教育委員会、さらに他の諸団体との協調的連携を模索していくことが必要になる。塾の会・愛知はその結節点になる覚悟である。